

「うそ！ 軽く当たっただけなのに！？」

## 最強剣士、金的敗北

世界を滅ぼせる最強剣士も  
ただの女性の金的にだけはかなわない！



玉子王子 著

## 1章 女性の肘の軽い接触も、男の股間になら大事故。押し殺した金的嘲笑に震えるオタク

周りも見ずに、往年の携帯ゲーム機をしている男。



軽く小太り、中背。

「ちょっと、なにあの人？」

電車乗り込むと、周囲の女性が少しざわめく。

若い女性ばかり。女性専用車両でもないが、偶然女ばかりが乗っていた。

——ちょっと、そりゃ専用車両じゃないけど。普通女ばかりになってるところに堂々と乗り込む？ っていうかアレなに？ なんかおじいちゃんところで見た気もするけど……ゲーム〇ーイとかいう無茶古い奴じゃない？ いや、ゲーム〇ーイが悪いって話じゃないけど……

少し離れた所に立っているギャルっぽい少女が眉を顰める。

別に彼女だけが嫌悪感を示しているわけではなかった。

電車中、なんとなく険しい空気が一瞬ながれ、そして消える。

嫌悪感がなくなったのではなく、表に出す大義名分がないから押さえ込んだだけだ。

小声で、女たちが話し始める。

「っていうか、あの人ゲームオタクだね」

「見たまんまね」

「童貞っばい」

「悪いよ、三十位の人に」

女子校生らしい少女らがわりと近いところで小声で話す。

唾を飲む男。

宮本氷馬。

学生時代は「名前負けのデブ」と言われ続けた男。当然童貞だった。

別に当然、ということも無いが、まあ童貞だった。

三十歳で童貞。

フリーターである。

いまや学生時代の友人たちとも切れたが、昔も童貞だった彼は特にそれだからかわれることは無かった。

性的なからかいは、全く受けなかった。

その理由は下半身にある。

**立って三五センチ**の超巨砲の持ち主なのだ。

はじめこそ「童貞なのに巨チン」とからかわれるが、徐々に男たちは静かになっていく。

萎えても三センチの巨砲は「これは未使用！」と強く思っても、性的に彼に勝っているつもり  
の男たちをガックリさせる**魔力**があった。

多少積極的なら、巨根好きの好き物女性と付き合うことも出来たかもしれない。

しかし引っ込み思案のゲームオタクではそれも望めず、めでたく**魔法使い**となったのだった。

しかし、十年来続けているネットゲーム風一人用RPGでは職業は剣士なのだった。

宮本、という苗字なので当然剣士だろうという話。

十年やっていれば当然何周もして、レベルはカンストだ。そろそろやめようかと思わないでもない。

そんな名前負けゲームオタ童貞は、チラッとまわりに目をやる。

——なんか、噂されてるな？

女に見られる、噂される。

実は、この童貞男、そういうことが結構ある。

ただ、不審者っぽい雰囲気や、なんとなくオドオドした感じで癪に障るというようなマイナスの注目を集める、というだけだが。

椅子に座る。

と、長椅子なので当然左右に女性が座っている。

「んー」

スカートを直します、という感じの動きを左右の女性がする。

直し終わると、**なぜか氷馬の左右の空間は始めより空いていた。**

「……」

何もいわない氷馬。

——いや、始めから触れては無かっただろ？ 距離開いてたじゃん。だから座ったわけだけど。でも、もっと距離開きたいの？ へこむ……ということはない、だっていつものことだもん。嘘です、

へこみます。

なぜそんなに避けられるのか、とガックリくる。

デブと呼ばれるが、多少小太りなだけ。

顔が悪いわけではない。

メガネはゲームオタクのマストアイテムとしてももちろんつけている。

——明るい性格なら、何とかいけるんじゃない？ とは思うんだが……。かなり運がよければ、恋人の一人や二人ぐらいは……。明るくなれば……

そうなれるなら苦勞はしない。

と、ドアが開く。

杖を突いた年配の男性……。というか、もう年寄りといえる年齢だろう、そんな男が入ってくる。

一瞬、電車内に妙な空気が広がる。

それは明らかに、氷馬が来たときとは全く違うものだった。

ギャル風の少女が何気ない風にそちらを見る。

——あの人……。年寄りのほうだよな？ 譲る？ 席。でも怒られたらいやだし……。でも年寄り立たせとくのはな……

あの人爺さんなの？ おっさんなの？

女たちの微妙な緊張はその値踏みからきていた。

と、氷馬が立ち上がる。

「ここどうぞ」

「ああ、すみません」

氷馬の席に座った老人は次の駅であっさり降りていく。

しかし氷馬はそのまま立っていた。

——座るとまた左右の女がスカートを直しだしそうで怖いからな……。さっきすでに空けてたのに、爺さんが座ったらちょっと寄ってきたぞあいつら。狭いんだな。でも、俺が座ったらまた空けそうだし。そんなにチョコチョコチンポジみたいに調整されたら一週間は思い出しへこみするし。

考えつつ、立っている。

女子校生らが小声で話す。

「ちょっと、見た目よりいい人かも」

「別に最初から悪い奴には見えないけど」

「ゲーオタなんてまわり見ない感じだけど」

氷馬には聞こえている。

——おお、褒められてるじゃん。

携帯ゲームを持つ手に力が入る。

「また座らないしね」

「横開けられたのわかったんだね」

「平気そうだけどやっぱりダメージくらってたのね。ぷぷ」

「ちょっと、笑っちゃ悪いよ、きゃはははは！」

——ああ、褒めるモードからすぐ嘲笑モードに。へこむ……

やはりガックリくる。

しばらくすると、客が増えてくる。

元々女性が多い路線や時間帯なのか、女性ばかりだ。

OLらしい女性が氷馬の前を通り、ちょっと眉を顰める。

——おいおい！ 後から来て「なにこいつ」って酷くないか？

女性専用車両ではないので、誰も何も言わない。

別にそんな嫌がっているわけでもない。

ただちょっとした違和感を感じたことを、一瞬の表情で伝えてくれるだけだ。

その連鎖で、微妙な緊張感のある車内となる。

人が増えてきたので、両手を上に挙げる氷馬。

ここ、うさぎ県では警察が実験的に婦警ばかり、司法関係者も女性ばかりとなっている。

彼女らはもちろん公正中立にやってくれる。

が、やはり女性ばかりの警察署に「性犯罪」で捕まるのは考えただけで「リンゴ」と例えられる氷馬の巨玉も縮む。というか元々怖がりによく縮んでいるが。

客が増えていく。

前に結構小柄な女性が立つ。

狭いので、密着だ。肘が軽く太股に当たる。

——嫌だな……ちょっとずれたら玉に当たる。

男なら自分もついているので気にするが、女性の場合一様ある種の恥じらいで気をつけてくれるが、それは男の「絶対当てられない」というのとはやはり違う、他人事なのだ。

——まあ、大丈夫だろう。電車が揺れない限りは。

と、電車が揺れる。

「きゃっ」

立っている多くの女性がバランスを崩しかけ、つり革にぶら下がる。

氷馬の前の女性もそうだった。

軽くよろけ、すぐに体勢を整える。

しかし、その僅かな動きで、肘が氷馬の股間に当たった。

「おぐううう」

腰を引き、呻く氷馬。呻くしかない。

前の女性が当たったこと自体には気付いてちょっと眉を顰める。

——あ、後ろの人押しちゃった。グニユッと変な感触……あら？ ちょ、凄く苦しみだしたわ！ これって、やだ……やだ！ うっそ！ まさかその……お、男の人の……大事な所に？ タマタマ？ うっそ！ ちょっと受けるんだけど！



「だっ、大丈夫ですか？」

笑うのを必死に押さえて肩を震わせつつ、体ごと振り返る女性。

「だ、だ」

——大丈夫ですから。っといえねえ……痛すぎる……ここだけは……

「あおおおおお」

「やだ、そんな……あの、お、お腹に当たったんですよね？」

——って、どう見てもタマタマ押さえてるけど！ でもここは、お腹って歴史認識で行かせて！  
だってタマタマに肘打ちって……ちよっと受けるけど女として余りやっただと言われたくないことじゃないもん。恥ずかしい！ 「あの子、キ〇タマに肘を」「やだ、受ける！」とか、周りの人に笑われる！

顔を真っ赤にしながら、きよろきよる周りを見つつ氷馬の顔を覗き込む女性。小柄だが、腰を引いて頭を下げている氷馬の顔に位置を合わせることはできる。

「そ、そ」

声が出ない氷馬。

それほど強烈に当たったわけではない。

むしろ、相当軽い。

しかし不意に、柔らかい女性の体の中では相当固い部類に入るだろう肘が当たったのだ。

男のもっとも虚弱な部分に。

唇を噛む。

「ほおおおおお」

——ほ、ほかの場所なら今の衝撃ぐらい、気付かないかもしれないけど……ここだけは無理。

「ぐぬううう」

つり革にぶら下がる。

汗が噴き出す。

そうなる、流石に肘金女性以外にも、異変に気付く女性がでてくる。

「え？ どうかしたんですか？」

「うそ、病気？」

一人しかいない男で、ゲーオタらしい小太り。結構目立っていた氷馬が苦しみだすと、すぐに車両中の女性が気付く。

「ぐううう、ちょ」

——やべえ！ 恥ずかしい！ 平静に振舞わないと。だってキ〇タマ打ちましたなんて……女に言えない……

「そ、腹が……」

と、前の女が真っ赤になって頭を下げる。

「大丈夫です！ 私の肘がお腹に当たっちゃっただけで！」

「え、お腹に？」

「そんなに苦しむほど、思い切り肘食らわすって……その人何かしたの？」

「まさか、痴漢？」

ざわめく女たち。多少殺気立つ。

真っ青になる肘金女性。

——ま、まずいわ！ 私が金ちゃんに肘打ちしたせいで、この人が痴漢扱いされるなんて絶対ダメ！

「ち、違います！ さっき揺れたときに、事故で！ 私が悪いんです！」

「さっき？」

「あんな揺れで？ 私も前の人の肘当たったけど……」

「平気よね、あんな揺れで当たるぐらい」

ざわざわと不思議がる女たち。

と、ギャル風の少女が気付く。

——ちょっとまってよ、あのデブオタ……腹押さえてないよ？ 隠そうと体捻ってるけど……やだ！ あれ、男の……大事なトコじゃん！ 肘ちょっと当たってもそりゃああなるか！ いや、知らんけども！ あんなもんぶら下げてないし、こっちは！

ぷ、と噴出してしまう。

「え、なに？」

隣の友人が唐突に笑ったギャルに目を丸くする。

見られて、俯いて笑うギャル。

「いや、言えない。女には言えない部分に、肘が」

「え！ ちょっと……うそっ」

顔を赤らめる友人。

会話は周りにも聞こえている。

言われてみれば、明らかに氷馬はそこを押さえている。

一瞬で、車内に何が起きたのか広がっていく。

「いやだ……そうだったの。じゃあしょうがないわね」

「え！ うっそ、金……大事なトコ？」

「ああ、なるほど！ クラスの連中も死ぬほど痛がるよね！」

「おおおお、っでしょ？ ぶぶ、受けるっ！ ドッジボールで当てちゃってマジギレされたよ！ こうやって股間押さえて怒るの！ 笑わないでいるの大変だったわ！ っていうか、押さえきれずに笑っちゃったわよ！」



恥ずかしすぎて股間を押さえられない氷馬を尻目に、周りでは「私が見た金的」の真似をする女が何人も出てきて、友人らがそれを見て手を叩いて笑っていた。

氷馬の顔がますます赤くなる。

——ひいい、ひでえ。こっちはマジでキ○タマが、今死ぬほど痛いのに……キ○タマ押さえて痛がるのがそんなに面白いのかよ。俺痛がれないじゃん……だって多分俺がやったら同情して笑わないでくれるだろうけど、頭の中でどう思ってるか今「真似してる女」相手に丸出しだし……

というか、チラチラと、楽しそうな同情しているような……ようは下の者を見る目で女たちが見てくるのに気付く。

女子校生が唇を噛む。

笑ってしまう。必死で笑わないように押さえる。

——ぶぶ、マジでタマタマやっちゃったんだ！ 面白！ あのお姉さん、私より小さいよ。絶対力



じゃかなわない、顔殴っても怒らせるだけだよ。なのに、タマタマに当たったらあのざま……必死で我慢してる！ さっきから同じポーズでピクリとも動けないじゃん！

女子校生が震えながら、笑うのも悪いので顔を背ける。

——だめ、笑っちゃ！ 笑ったら怒られるとかじゃなくて……あ、あ……あの人泣いちゃいそうだから！ 今のあの顔……せ、成人男子がしていい顔じゃねーよ！ って普段なら思うけど……キ〇タマだからね、キ〇タマ！ ならあの顔もありかな！ って、玉ぶら下げてない私でさえ思っちゃう。もうここで笑われたらあのまま泣き出しかねないわあの人！

「ちょ、やめてよ……私まで……」

女子校生数人が、笑いかけた一人に影響されて肩をふるわせ始める。

「だ、だめ、だめだよ……あの方は男の人の一番大事なところが痛くて痛くて……もう泣きそうなんだから」

「泣きそうって！ 確かに泣きそうな顔だけど！ それは大事なところが痛すぎるからで」

「もう、変なもんぶら下げてるからこうなるのよね」

「変なもんぶら下げてるって！」

「だってあの人ちょっとデブってるけどガッチリしてるよ？ 下手すりゃこの車両の女全員と殴り合っても勝てるんじゃない？ た、た、ただしそれはこっちがキ〇タマ狙わなかった場合で」

「ちょっと、キ〇タマって！」

「やだ！ その……男の急所を？ 狙わなかった場合でね、もしも狙ったら一番小柄っぽいあの方の軽い一発で「はごおおお」状態よ！」

「弱い！ 男って弱すぎでしょ！」

「違うわ、キ〇タマさえ無ければ強いだよ！」

「ああ、確かにその通りね！ で、でもそれが無いと、ぶぶっ、男じゃないじゃん！」

太股を叩き、必死で笑わないように堪える少女たち。

それはもうほぼ爆笑しているのと大差が無いだろう。

女子校生らの声を殺した会話も、狭い車内ではまる聞こえだ。

同じような他の女子校生はもちろん、年下っぽい学生も、年上の主婦やOLたちも顔を真っ赤にして笑いを堪える。

「だ、だめよ……」

主婦の女性。

——アレは男の一番の泣き所なんだから……浮気した旦那のキ〇タマ蹴ったとき思い出して……マジで泣かれたからこっちが謝っちゃったじゃない！ まさかあんなに効くとは……思い出しても笑っちゃうわ。……じゃなくて、同情するわ！ まあ実際には、同情不可能だけど！ ああいう物をぶら下げてない人間としては！

必死で押さえながらも、なぜか笑わずにはいられない女性たち。

その中で、一人だけ真っ青な者がいた。

肘を当ててしまった張本人だった。

——ひい、なんてこと。私がこんな……軽く当たっただけなのに、私でもあのぐらいなら平気なのに。でも、男の大事なところだったから、この人なんか死にそうだし……。はじめは「え、キ〇タマ？」ってちょっと笑えたけど、ここまでダメージが抜けずに、それなのに皆がクスクス笑ってたら流石に私まで笑ってられないわ。怒られるとかじゃなくて、可愛そう過ぎるもんね。

「うわ、うわ……その、そんな……みんな心配してくれてるからあんな感じなんですよ！」

「あ、ああ。いや、もう大丈夫だし……」

何とかましになってきた。会話は出来る。

というか、動こうと思えば一様は、始めから動ける。

——この子が「とどめにキ〇タマ二個とも潰してくれるわ！」とかいって襲い掛かってきたら、何とか抵抗できるが……そのぐらいの状況で無いなら動きたくない。だって動いたらキ〇タマに響くから……揺らしたくない、太股で擦りたくない。

本来ならその場に倒れて股間を押さえて丸くなりたかった。

しかし男の見栄で、吊り革にぶら下がって耐えた。

その体勢は、足に力を入れないでもいられるのでまあ、急所を保護するのに悪くは無い。

が、最適でもない。

中途半端な体勢だった。

——あああ、今からでもこの場に転がりたい。でも転がったらどうなる？ いや、別にどうってことも無いか……？ そうだよな、現状も床に転がるのも、変わらんよな、もう笑い者だし。それならいっそ……いや、でも。

「あっ」

指の力が抜ける。

放そうか、と悩んでいて覚悟が弛んだせいかもしれない。

どしゃ、と電車の床に転落する氷馬。

静まり返る電車。

「おがううううう！」

急所に響く衝撃で思わず声を挙げてしまう氷馬以外、全員が沈黙していた。

——うわっ、いてえ！ そうだ、玉に響くんだ！ でも、床に転がれて楽になる……もう股間押さえて転がろう、新たなダメージも食らったし……思ったとおり、みんな笑わないでくれたし。

「ちょ、あの人がいま、おがううううとか！ 床に落ちた悲鳴じゃなくない？」

「あれはあれよ、タマタマに衝撃が！」

「衝撃って！ 結構ソフトランディングだったけど？ 腕伸ばしきって、ぶら下がってたところからだし！」

「いやいや、そこがタマタマの不思議なところ！ っていうかすでにダメージ受けて弱ってたからね！ ほら見てよ、あの痛そうな顔！ っていうか、情けない感じの顔！」



「あ、わかるわかる！ 男ってそうよね！ ほかのところならなんていうか、「怒り」の混じった、ああこいつらって「雄」なんだなって、妙に実感する攻撃的な顔するじゃない？」

「女とは違うのよね、なんていうか「暴力」へのスタンスが。女にとってそれは別の世界のことで。だから痛いことがあったら「え、なんで？」って理不尽さに怒るっていうか……同じ怒りでも違うのよね。男は「反撃する」というか「戦いが始まった」感じの怒りなのよね」

女子校生らがまた、今度はあまり声も抑えずに話していた。

ちらちらと、氷馬の方を見る。

楽しげに顔を赤らめ見下ろしてくる。

「あ、さっきよりガッチリアソコ押さえてるよ」

「やっぱり痛かったんだ！ タマタマ！」

「ふふ、であの顔……タマタマとそれ以外じゃ男の顔が違うのよね」

「それ以外だと「攻撃的」な顔だけど、タマタマのときだけはなんていうか心から「そこだけはやめて」って、もう始めからへタレてるっていうか逃げの顔するのよ」

「わかるわ！ 今してるし！」

「ちょっと声が大きいわよ！」

「あ……。大丈夫ですか？ タマタマ？ そうだ、背中叩きましょうか？」

「腰でしょ、腰！」

近付いてくる女子校生たち。

四人ほどが顔の方にしゃがんで話しかけてくる。

——やめてくれ！ 玉やられて動けないとか、女に見られたくない……っていうか見られてるけど、

気付かない振りするのが大人の女の嗜み……あ、この子らまだ女子校生か……十歳以上年下なんだ。そんな子らに「この人キ〇タマ打っちゃったよ！」とか笑われてんのかよ……男なら絶対笑わないのに……女って奴は……

「いや、大丈夫……っていうか、今腰打っただけで……別にその……」

いわれて、手を叩く女子校生。

「あ、玉は大丈夫と？」

「ちょっと、玉って！」

「いや、目玉のことだし。ほかに玉ある？」

「そりゃ二個あるでしょ、男の人なんだから」

「っていうかあの反応なんだからね」

クスクス笑いつつ、見下ろしてくる。しゃがんだ状態のスカートを見あげているのでパンツもモロ見えだが、ここで立ち始めるとも收拾がつかなくなるので慌てて目をそらす。

元々巨大というのもあるが、並でもこの状況で立つわけには行かないだろう。

——見ちゃダメだ……でも見ちまう。可愛いパンツだな。男のとは全然違う……男のは機能重視しかないからな。俺なんか特にでか過ぎるから……家じゃパンツはかず柔らかいズボン直穿きだし……男じゃどうがんばってもスタイリッシュなパンツにはならない、どんな租チンでも女のスラッとした股間みたいには行かない……あ、ヤベ！ ガン見しちまった！ き、キ〇タマ蹴られるのか！？

このうさぎ県では、そういう出来事は多い。

痴漢が見つかり、その場にいる女性らに制圧名目で金責め玉潰しを食らい、その後で警察に突き出されるケースが多いという。

真っ青になる氷馬。

その表情の変化に何かを感じ取る女子校生。

「え……あ、ちょっと……」

パンツが見えている事に女子校生が気付く。

目配せして、知らせ合う。

が、特に何もない。

見えないように膝を締めるだけで、痴漢だ、と怒ることも無かった。

気付かれた事に氷馬が気付く。と、それにも女子校生が気付く。

ニコ、と笑いかける。

「あ、大丈夫です。事故で見えちゃっただけですよ。わかっていますよ」

——普段ならキ〇タマを文字通り袋叩きだけど……すでに落ち度も無いのに金ちゃんをやられて転がってる男には、なんか優しくなれるわ。ふふふ、私は絶対こういう目に遭わないわ。だってキ〇タマぶら下げてないもん！ そう思うと優しくなれちゃう。

「そうそう、だから痴漢扱いして、タマタマに追撃をと、それは無いですから」

「ちょっと、そういうこという！？ ぷふ、ほんと、そういうことはしませんから。安心してブラブラさせてください」

——みっともなくね！ ホント男のアレってヤバイわよねデザイン的に、明らかに浮いてるもん。ワニとかなら玉も竿もちゃんと収納してるのに、哺乳類の雄どもと来たら……急所ブラブラって！

「まあそれで肘うち食らっちゃったんだけどね」

「ひ、肘打ちじゃないですっ！ か、軽く当たっただけです！ 女なら平気なんだけど……男の人だったから……」

「ただの接触が必殺技に早変わりってわけね」

ニヤニヤしつつ、見下ろしてくる女子校生たち。気付くと、離れている女性たちも皆そんな感じだった。

結局のところ自分には付いていないので、他人事として観賞できるのだろう。

恥ずかしさに鳥肌すら立てつつ氷馬は、

「いや、大丈夫。大丈夫だし」

何とか起き上がる。

「あ、起きないほうがいいんじゃない？」

「だ、大丈夫」

「っていうかお兄さん「大丈夫」しか言ってないし！ タマタマ痛すぎて頭回ってないよ！」

「そうだ、薬飲みますか？」

ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいなら潰れても十秒で治す薬がコンビニで売っている。

それを皆知っているので、我慢しつつも笑ったりできるのだ。

万一潰れたら……という心配が無い。いや、潰れてもすぐ治る、という話だが。

だから安心して笑っていられるわけだ。

それでも必死で押さえる女たちは優しいのかもしれない。

「あ、薬ならありますよ」

「私も」

「私も」

「私も」

——なにに使う気なんだよ！？

電車中の女性たちが全員手を挙げるのを見て、股間がギュウと縮むのを感じる氷馬。

まあ二度の急所への衝撃で、すでに縮んでいるのだが。

「い、いや……薬は」

「そうですね、これは怪我は治っても、痛みは変わらないですし……」

「っていうか潰れたらもっと転げまわってますよ」

唾を飲む氷馬。

——なんだその確信の籠った発言は。転げまわる「と思いますよ」とか「らしいですよ」じゃないのか？

ドS女性の割合が世界一高いといわれるうさぎ県である。

**去勢地下闘技場**というのが何処かにあると氷馬も聞いている。

一様合法的な企業らしいので——ナノテクで一瞬で治るので、「玉が潰れること」に相当寛容な社会だった——調べればわかるが調べたくもなかった。

——この電車の中にも、玉潰したことがある女が何人かいてもおかしくない……いや、考えすぎか。

「そうよね、もっと「おぎゃあああああああああ！」とか絶叫して、転げまわるよね」

「そうそう、何もかも放り出して、その場に転がっちゃうよ」

「二個とも潰れたら、もう誰だろうが泡吹いて白目剥いて気絶するのよね」

「凄い強い格闘家でも何でも……まあ別に潰さないでも軽い一発で「おごおおお！」だけどね！」

「本当にキ〇タマぶら下げてデカイ顔とか良く出来るわ……」

突如、**去勢談義**に花を咲かせる女たち。

かなり若い子たち以外は、当然のようにその話に加わってくる。

玉が極限まで縮む氷馬。

——いやいやいや、まさかこの女ども……じゃなくて、**女性様**たちが……**皆玉潰し経験者**とか、あるわけない。ネットとかで調べた話に違いない。

震えつつ、とにかく立ち上がる。

都合よく、電車の戸が開く。

降りる場所ではないが、一刻も早く去勢談義から逃れたかった。

「あ、本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫」

「だからお兄さん「大丈夫」しか言ってないって！」

「まあ歩けるんならいけるかな？」

「内股で摺り足だけど！」

「いっちゃだめ、普通に歩いたらタマタマ痛いんだから」

もう完全に我慢の限界を超えたのか、それとも面倒になったのか、笑いが爆発的に広がる。

腹を抱えて笑うのがほとんど。

肘打ちの女でさえ、氷馬に背中を向け、どう見ても笑っていた。

顔を真っ赤にしつつ降りる氷馬。

——まったく、酷い目に合った。っていうか、まだクソ痛い。

チラッと見たところ、また周りにはいるのは女ばかりだった。

しかし先ほどの電車の中の者たちと違い、まだ氷馬がどうして苦しんでいるのか知らない。

なら隠せるからと、またも見栄から股間を押さえない事にする。

ヨロヨロと駅を歩く。

女子校生らが隣を通る。

「うわ、なにあの人。変だよ」

足が悪い歩き方でない事はすぐわかる。

足が悪い人間は摺り足的な歩き方はしないだろう。

その辺で摺り足をしている人間がいればいやな目で見られるのも当然。

しかし、女子校生の一人が気付く。

「ちょっとまって、あの人なんか……股間的な」

「あっ！」

気付く少女たち。

ぱ、と顔を赤くする。

「やだ、そうなんだ。その、大事なところを？」

——なんで気付くんだよ！？ いや、確かに見る人間が見れば「あ、キ〇タマ」ってわかるけども！

頬を引きつらせる氷馬。

それに、女子校生たちは顔を綻ばせる。

「やっちゃったんだ……我慢強い人ね、うちの男子なんて傘で後ろから引っ掛けただけでその場から動けなくなるよ」

「本当にそんなに痛いのかよ！ って思うよね！」

「キ○タマやられたくないから大げさに言ってんじゃね？ ってね！ でもまあぶら下げてない身としては寛容にね、信じてやるしかないというか」

「お兄さん、腰叩きましょうか？ 男の人って……ぶぶっ、なんかそうしますよね？」

「だ、大丈夫……」

顔を真っ赤にして、何とか早歩きする。

——ああ、いやだ！ 自分がキ○タマついてないからってなんなんだ女って！？ 男だけこんなわかりやすい急所がついてるとか不公平じゃね？！ 大体……

と、階段。

躓く。

「あっ」

というまに、階段を転げ落ちる氷馬。

ゴンゴン体をぶつけつつ転がり、ついに床に頭から叩きつけられるところで意識が吹き飛ぶ。

体験版終わり

この後、主人公ゲームの世界へ転生。

割とよくある展開ですが、

最強のはずの主人公に普通の女性たちがこれでもかと

金的で襲い掛かり、一発食らうともう手も足も出なくなります。

いくら強くとも、急所だけはどうにもならないというキ○タママゾ展開。

続きは製品版でお楽しみください。